

「日本博覧図 千葉県後編」より石井五兵衛邸宅之図を
スケッチして彩色



黒潮育んだ房総の洋画家・石井光楓

絵と文・熱田親憲

題字・熱田泰華

紀伊・房総

くろしお物語

◇34◇

(大久保守著、三好企の、イワシ漁の盛ったへ渡航。3年間米国の画2001年)が送ら石井家の網主ぶりを示す一枚の銅版画が「日本博覧図 千葉県後編」にあった。原画の母屋、網納屋、作業場などの家屋や多くの人々の往来、干鯛のための干場などをスケッチしてみると、岩船きつての旧家だったと思えた。

一水会公募作品展 校同級生のT氏にこので、水辺の水彩画をみ ことを知らせると、書 ているうちに、高校時 籍「夢は大海原を越え 代の美術の石井先生を て今よみがえる洋画 思い出した。早速、高 家石井光楓の軌跡」

岩船(現いすみ市)の 網主・石井五兵衛の次 男政二として1892 (明治25)年の生まれ。 政二がまだ幼かった頃

少年時代の政二は活 況な家業を背に、海を 間近に見る裏山や海で 済的には困らなかつ た。

パリで新境地を開く

ゆったりと遊び、岩船 た。

当時のパリの新聞 「ル・フィガロ」では 「光楓は外面的に西洋 人化しても心は永遠に 東洋人。これこそ『新 オリエンタリズム』だ。 出品作『モレ近郊の口 ワン川流域』のパリ郊 外が水墨画のように表 現されている」と評価。 遠景には「ぼかし」技 法が見られ日本の霧や 霧が原点であろう。

光楓先生は黒潮の運 ぶ風に育まれた明るさ とおうようさを持って 海外に渡り、パリで日 本的洋画の新境地を開 き、実力のある先生だ った。余生は描くこと を楽しんだ画家であつ たようだが、生徒の私 からみると少々残念と 言えよう。

光楓先生は1931